岐阜県西濃地域周辺における
葬送儀礼の現状と僧侶の役割

――聞き取り調査の結果から――

磯　部　美　紀

1. はじめに

日本ではこれまで、大半の葬送儀礼（以下、葬儀と省略）が僧侶を介して営まれてきたが、昨今、僧侶の介在しない葬儀が増加している。この傾向は特に都市部で顕著であったが、次第に地方にも波及している。一方で、葬儀社を介さずに葬儀を営むことは困難な状況である。伝統仏教教団からは、葬儀社主導の葬儀が増加し、僧侶の役割が低下するのではないかと懸念する声も挙がる［曹洞宗総合研究センター編 2003:293-298］。宗教者（僧侶）が葬儀社に対して、互いの役割の範囲に言及する契機は、1995 年の葬祭ディレクター制度[(1)]の導入にあるとされる［玉川 2018：97］。

最近では、インターネットを活用して遺族と葬儀社とを取り次ぐ葬儀仲介業者[(2)]も存在感を増しており、なかには「お坊さんのいないお葬式」を謳う葬儀仲介業者[(3)]もある。「お坊さんのいないお葬式」代表取締役の大森嗣隆氏は、仏教を日常的に信仰していない人々が、葬儀の時にのみ仏式を選択することは、読経のためだけの僧侶を依頼している時点で、信仰ではなく「ただの形式の踏襲」に過ぎないと指摘する［大森 2020：109］。

では、現代日本の葬儀において、僧侶が介在する意味はどのような点に見出せるのか。本稿の目的は、岐阜県西濃地域周辺の葬儀を事例に、僧侶が自らの役割をどのように認識しているのかを確認するとともに、葬儀社の視点[(4)]から僧侶の役割を捉え返すことによって、僧侶が葬儀に介在する意味を検討することである。本稿では、真宗大谷派寺院の住職 5 名、葬儀社 2 社への聞き取り調査により得られたデータを使用する。

岐阜県西濃地域ではこれまで、手次寺（菩提寺）の僧侶が門徒（檀家）の自宅に赴いて仏事を営むなど、日常的に僧侶と門徒が緊密な関係を築いてきた。しかし近年、過疎化や高齢化など現代的課題に直面するなかで、

これまでのような僧侶と門徒との関係は揺らいでいる。当地域は、手次寺の僧侶と門徒の関係が不安定になりつつある過渡的地域として位置づけられる。

2. 調査の概要

2-1　調査対象地域の特徴

岐阜県西濃地域とは、岐阜県南西部の総称であり、大垣市、海津市、安八郡（神戸町、輪之内町、安八町）、揖斐郡（揖斐川町、大野町、池田町）、養老郡（養老町）、不破郡（垂井町、関ケ原町）の２市４郡９町を指す（図1）。北部は能郷白山を境に福井県と、東部は長良川・木曽川を境に愛知県と、西部は越美・伊吹山地、鈴鹿山脈、養老山地を境に福井県、滋賀県、三重県に隣接する。北部には1,000 m級の山地が連なり、南部へ揖斐川、長良川、木曽川の三川が流れている。中央部は、三川に涵養された肥沃な平野部を形成し、中京・関西・北陸を結ぶ交通の要衝として、また豊富な地下水を利用した化学・機械などの製造業を中心とした工業地帯として発展を続けている［岐阜県西濃保健所・西濃保健所揖斐センター 2020：2］。西濃地域の推計人口は、2020年4月1日現在359,730人である［岐阜県環境生活部統計課編 2020a：3］。老年人口の割合は年々増加しており、特に揖斐郡北部の山

図１　岐阜県西濃地域

※岐阜県社会福祉協議会 HP、
ヤマショウ株式会社 HP より筆者作図。

間地域では過疎化と高齢化の進行が著しい。

『令和元年岐阜県統計書』によれば、西濃地域における仏教系の宗教法人数は 737 であり、その内訳（宗派別上位 5 宗派）は、真宗大谷派 415、臨済宗妙心寺派 81、浄土真宗本願寺派 61、浄土宗 53、曹洞宗 45 となり、真宗大谷派の占める割合が群を抜いている［岐阜県環境生活部統計課編 2020b：378］。西濃地域（大垣教区）の真宗大谷派の門徒の特徴として、「正信偈（しょうしんげ）のおつとめができる割合[5]」が他地域よりも高いことが挙げられる［真宗大谷派宗務所企画室編 2014：101］。当地域では、小学生が夏休みに正信偈のおつとめを練習する取り組みが多く見受けられるなど、人々の暮らしにおいて寺院とは身近な存在であると言えよう。

2-2　住職への聞き取り調査の概要

住職への聞き取り調査の目的は、住職がどのような思いで葬儀を執り行い、いかなる役割を果たしているのかを把握することである。調査対象は、真宗大谷派の寺院 5 ケ寺の住職（A ～ E 寺住職）である（表 1）。

調査対象の選定において、門徒戸数が 100 ～ 300 軒程度であり、月参り[6]などを通して常日頃から門徒との関係を築いている寺院であることを考慮した。選定方法は、筆者がすでにラポール[7]を形成していた A 寺住職の紹介によるものであり、B ～ E 寺住職の調査には A 寺住職も同席していた。2021 年 3 ～ 4 月に、寺院本堂や客間、真宗大谷派大垣教務所において各住職に 2 時間半～ 4 時間程度の聞き取り調査を行った。質問項目は寺院、

表 1　調査対象者・寺院の概要

寺院	所在地	門徒戸数（軒）	住職年齢（歳）	住職歴（年）
A寺	岐阜県揖斐郡池田町	150	58	35
B寺	岐阜県大垣市	80	44	6
C寺	岐阜県大垣市	120	62	20
D寺	岐阜県海津市南濃町	280	52	24
E寺	愛知県一宮市東五城	155	58	16

住職、葬儀、法話、故人との関わり方の５つを軸に構成し、一部を構造化して尋ねた。

Ａ～Ｅ寺のすべてに共通するのは、一部あるいは大部分の門徒に対して月参り（お常飯）およびオトリコシ[8]を行っていることであり、これは葬儀の時だけではなく平時から門徒との付き合いがあることを意味する。次に、各寺院の特色を端的に示すと、Ａ寺は農村地域に所在し、田地寺院としての性格[9]を有してきた。Ａ寺門徒の多くは寺院から徒歩圏内に分布しており、その大部分がJA会員であることから、葬儀の際には農協系の葬儀社が度々利用される。Ｂ寺とＣ寺は大垣市の中心部に位置しているが、寺院から徒歩圏内に分布する門徒はわずかであり、自動車で10～30分圏内にドーナッツ状に分布している点に特徴がある。Ｄ寺とＥ寺は木曽川流域に位置し、この地域には片門徒や半門徒、片檀家と呼ばれる習俗[10]がある。

2-3　葬儀社への聞き取り調査の概要

葬儀社への聞き取り調査の目的は、西濃地域における葬儀形態の変化、葬儀社と寺院との関係性、僧侶の介在しない葬儀（無宗教葬、直葬など）の実態を把握することにある。調査対象は大垣市内の葬儀社２社（F、G葬儀社）である（表2）。これは、Ａ～Ｅ寺住職が葬儀の際に訪れることのある葬儀社のうち、調査協力を依頼して承諾が得られた２社である。2021年４～５月に、F葬儀社には予めFAXで質問項目を送信し、電話で１時間程度のインタビューを行い、G葬儀社[11]には対面でのインタビューを

表２　調査対象葬儀社の概要

	（本社）所在地	創業	従業員数
F葬儀社	岐阜県大垣市	2009年11月	4名
G葬儀社	岐阜県大垣市	2000年7月	115名

2時間程度実施した。質問項目は、葬儀社、葬儀、利用者（遺族）、法話、コロナ禍における葬儀の5つを軸に構成し、一部を構造化して尋ねた。

ここで、2つの葬儀社の特色を確認する。F葬儀社の事業は、シンプルな葬儀を提供することに特徴がある。F葬儀社創業の背景には、従業員らの前の職場である大手葬儀社で耳にした遺族の声があり、遺族から「もっと小さいお葬式をしたかった」との声が寄せられた経験に基づく。2009年の創業当初より、低価格な葬儀、家族葬（創業当初は「シンプル葬」と呼称）をメインに手がけてきた。葬儀会館は大垣市の幹線道路上に1店ある。

一方、G葬儀社は2000年創業以来、「感謝で送るお葬式」をテーマにし、そうしたテーマに沿った葬儀を具現化し続けてきた。自らを、ミッション系葬儀社、すなわち「日本のお葬式に感謝という新たな価値を付加せしめ再び尊きものにせしめん」との使命を持つ葬儀社として位置づける。葬儀ホール･会場を西濃地域、岐阜市、恵那市、中津川市に14店展開している。霊柩車に遺体を乗せて故人ゆかりの地を巡る「クルージング」サービスを実施したり、故人の人柄を遺族から丁寧に聞き取り、それをもとに「故人らしさ」を演出するなど、特色ある葬儀を行うこともある。

3. 西濃地域周辺の葬儀――僧侶の役割をめぐって

本章では、住職および葬儀社への聞き取り調査の結果に基づき、西濃地域周辺における葬儀の現状とそこでの僧侶の役割を記述する。

3-1　葬儀の現状――僧侶の介在する葬儀を中心に

ここでは、西濃地域周辺において葬儀が昨今どのように営まれる傾向にあり、僧侶はいかに関与しているのかを整理していく。

まず葬儀の行われる場所に注目すると、かつては自宅が主流で、わずかに公民館や寺院本堂を会場とすることもあった。しかし現在ではごく少数の例外を除いて葬儀会館で営まれるようになった。住職らによれば、大半の葬儀が葬儀会館で営まれるようになった時期はそれぞれ、一宮市で2004年頃、大垣市で2005年頃、池田町で2010年頃である。この変化は、自宅葬の際に主要な労働力を提供してきた地縁関係に基づく相互扶助組織の機能低下のほか、葬儀会館の設立に後押しされたものであることが住職らから言及された。

次に、葬儀の会葬者と故人の間柄に着目すると、昨今は地縁関係者や遠縁の知人による参列を断わり、家族や親族とごく少数の親密な知人に限定する葬儀が増加傾向にある。これは、家族葬の広がりとして理解できる。家族葬が受容された時期は住職ら曰く、海津市で2015～2017年頃、大垣市で2015年頃である。家族葬が広がった背景としてD寺住職は、家族葬専用ホールの設立や、生前の関係性の希薄化を指摘する。また、新型コロナウイルスの流行を契機に、家族葬が増加したとA、E住職は語る。

ただし「家族葬」という言葉は、2段階の変化を内包している。第1段階は、地縁関係者や義理の参列を断り、血縁関係者を中心とする親密な人々に会葬者を限定していくことである。第2段階は、会葬者数そのものが減少していくことである。かつては30名程度の家族葬が一般的だったが、新型コロナウイルス流行の直前には10～15名程度の家族葬が主流になった。さらに現在は、新型コロナウイルスの影響で市営の火葬場が立ち会い人数を制限していることから、F葬儀社では火葬場の基準に合わせて会葬者数を10人以内に制限している。

会葬者数の減少と連動するように、ひとつの葬儀に立ち会う僧侶の人数も減少している。従来の葬式は、導師を務める手次寺の住職以外にも、手次寺の役僧が鑿役(きんやく)[12]として赴いたり、近隣寺院の僧侶が法中(ほっちゅう)として招かれ

たりと、複数の僧侶が立ち会って（伴僧（ばんそう）ありで）営まれてきた。しかし近年は導師のみの葬式が大半を占め、2名以上の僧侶で葬儀を営むことは年に1～2回程度であるとB寺住職は語る。導師のみの葬儀が増加した背景として、B寺住職は経済的事情を挙げ、「一人（でも）減らした方が安く済むから。お坊さんが一人（だけ）来て成り立つのであれば（そう）してくださいというのが増えてきた」という。このことは、昨今の葬儀で喪主を務める者の多くが、平時は仏教との接点を持ってこなかったこととも無関係ではない。

> 亡くなられるお父さん、お母さんがずーっとお内仏で手を合わせておられて。今まで全く関知していなかった状態で、……お内仏に手を合わせたことのない人が、葬儀の時にだけ伴僧が（必要です）と言うと、なかなか受け入れにくいんだろうなということは思う。（2021年4月5日、B寺住職への聞き取り。丸括弧内は筆者による補足、以下同様。）

ここでは従来の葬儀において当然視されてきた慣習や、儀式作法としては本来こうあるべきという規範に対して批判的なまなざしが向けられていることがうかがえる。葬儀において真に必要なものとは何なのかが問われていると言えよう。一方、D寺（海津市）、E寺（一宮市）では、現在も伴僧ありの葬式の方が多く営まれるという。伴僧の有無をめぐっては、葬儀変容の進行度合いが地域ごとに異なることと少なからず関係すると考えられる。

仏式葬儀の形式上の変化として、繰り上げ初七日の実施にも触れておく必要がある。これは初七日を命日から七日目ではなく葬式当日に繰り上げて、還骨勤行[13]と連続する形で勤めることである。儀式本来の意味合いには反するが、遺族らの事情（遠方に住む、仕事を休むことが困難など）に鑑

みると理にかなった方法と言える。大垣市では2010年前後から、一宮市では2005年頃から、この形式が見受けられるという。

コロナ禍での変化は、会葬者数が減少したこと（火葬場・葬儀社の人数制限含む）、新型コロナウイルス感染防止を理由に遠縁の人々の参列を遺族が断りやすくなったこと、リモート葬儀がわずかながら実施されている。G葬儀社では、コロナ禍での工夫として、通夜・葬儀前に焼香をあげるのみの参列形態や、リモート参列、後日視聴可能な動画の配信を行っている。

3-2　僧侶の介在しない葬儀――葬儀社と僧侶

次に、葬儀社への聞き取りをもとに、僧侶の介在しない葬儀に焦点をあてることで、葬儀における僧侶の役割を捉え返す糸口を探っていきたい。

まずはF、G葬儀社の手がける葬儀の種類とその内訳を示す（図2）。図2の通り、聞き取り調査時点（2021年4～5月）での葬儀の内訳は、F、G葬儀社ともに、家族葬（家族・親族など近しい人が参列）が約60％を占め、一日葬（通夜は行わず葬式のみ）が10％、火葬式（火葬場でのお別れ）が30％、無宗教葬（宗教色を排した自由な形式）が1％程度であり、G葬儀社でのみ一般葬（家族・親族のほか、友人、知人、仕事関係者等も参列）が2％程度手がけられている[14]。本節で注目するのはこのうち、火葬式（僧侶の介在しない場合）と、無宗教葬である。

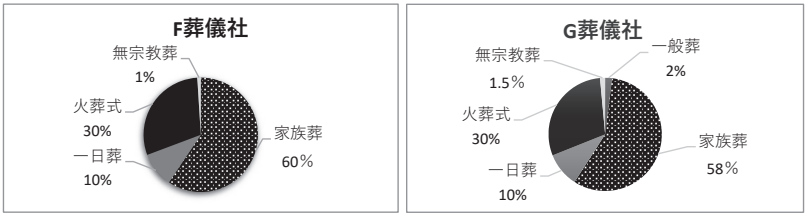

図2　葬儀の種類と内訳

3-2-1　火葬式（直葬）

現在、F、G 葬儀社でともに葬儀全体の 3 割を占めている火葬式とは、葬儀会館で通夜や葬式は行わずに、火葬場でのみお別れをする葬儀形態を指す。F 葬儀社によれば、10 年前であれば火葬式が選択されるのは、故人が生活保護受給者であったり、故人に家族がいないために遠い親戚が喪主になる場合など、特殊な理由がある場合に限られたが、現在の火葬式は家族の有無にかかわらずに営まれるという。今から 3 ～ 4 年前、東京においては火葬式が葬儀全体の 3 ～ 4 割を占めるようになったと聞いて、火葬式の割合の高さに G 葬儀社は驚いていた。しかし、今年になって G 葬儀社の手がける葬儀でも火葬式が全体の 3 割を占めるようになったという。火葬式の割合が上昇した要因として、新型コロナウイルスの影響が大きいことが指摘された。

火葬式には、僧侶が介在する形態と介在しない形態がある。僧侶が介在する場合は火葬場で短時間の読経をすることになる。G 葬儀社では、火葬式全体の 6 割が僧侶なしで実施されている。一方、F 葬儀社においては、火葬式を選択する人のほとんどが、事前の打ち合わせ段階では僧侶なしを希望するという。このことは F 葬儀社を利用する遺族の多くが低価格志向であることから理解でき、僧侶に布施を渡すことが困難な経済的事情が見て取れる。さらに、「本当はお寺さんなしでもいいんだけど」と、喪主自らの宗教心のなさを根拠にした声も多く聞かれるという。しかし、葬儀社が僧侶の立ち会いを提案する場合もある。

> 打ち合わせでご家族さまとお話した時に、このまま何もなしに火葬してしまうと……後々後悔されることがあるかなという可能性がみえるときがあるので。……炉前のお経……を、2 ～ 3 分でも……していた

だいた方がいいんじゃないですか、法名もつけてもらえますよというお話をさせていただいて。……お寺さんにお経をあげていただくと安心する……。もう一つは、故人さまに対して最低限のことだけはやってあげることができた、満足かといったらどうか分からないが、そういう気持ちは働くので。（2021 年 4 月 27 日、F 葬儀社への聞き取り）

火葬式（僧侶なし）を希望した遺族に対して葬儀社が、僧侶から火葬場でお経を読んでもらったり、法名をつけてもらってはどうかと勧めることもある。こうした提案からうかがえるのは、僧侶が葬儀に立ち会うことや読経、法名の授与は、遺族や会葬者に安心感を与えうること、また喪主らに故人をきちんと弔った実感を持たせうるということである。上記のような説明を受けた結果、F 葬儀社で営まれる火葬式の 3 分の 2 が、最終的には僧侶ありで実施されるという。

3-2-2　無宗教葬

無宗教葬は、F 葬儀社では年間 2 件程度（葬儀件数約 16 件／月）、G 葬儀社では月 1 ～ 2 件営まれている（葬儀件数約 100 件／月）。無宗教葬は、特定の宗教に則ったり、従来の形式にとらわれるのではなしに、故人や遺族の意思を反映した自由な形式で行われることを特徴とする。

G 葬儀社の提供する無宗教葬は 2 種に大別できる。ひとつは葬儀仲介業者から受注される無宗教葬であり[15]、もうひとつは G 葬儀社独自の無宗教葬である。前者の場合、無宗教葬の式次第が葬儀仲介業者ごとに定められているため、それに従って献花やスライドショーの投影、BGM に音楽を流すことなどが行われている。他方で G 葬儀社独自の無宗教葬は、公式 HP には掲載がなく、遺族が G 葬儀社に直接依頼することで実現化される。無宗教葬の式次第が予め用意されているのではなく、喪主らの希望に従っ

て何をするのかを決定していく。この自由度の高さは、しばしば喪主らと葬儀社を共に困らせるという。G 葬儀社は、「宗教家がいないとやりにくい……宗教があれば、その儀礼に基づいてやるのでおおよそいいんですが。それがないとなると、何をしても良いので、（逆に）何をしたら良いのか分からない……。お客さんも分からない」と語る（2021 年 5 月 4 日、G 葬儀社への聞き取り）。定型化された式次第がない状態でゼロから葬儀を形づくることは、喪主にとっても葬儀社にとっても、負担が大きいことがうかがえる。続く発言では、葬儀における宗教の役割が示唆された。

> 葬儀において宗教ってすごく大事で、宗教儀礼がないとお客さんの受ける印象は全然違う。……無宗教葬でやった人も、手を合わせたくなったり、焼香はないんですかと言ったり。自分の中で拠り所をつくりたい、何かやったと思いたい。……宗教がある方が、葬儀社側からするとやりやすい。葬儀社としても（葬儀の意義を）伝えやすい。（2021 年 5 月 4 日、G 葬儀社への聞き取り）

ここから、宗教儀礼として定型化された式次第を踏襲することで、遺族や会葬者は弔いの実感を得やすくなること、葬儀社は葬儀を価値あるものとして提供しやすくなることが推察される。

次に F 葬儀社では、G 葬儀社同様、無宗教葬の式次第を予め定めているわけではなく、喪主らとの話し合いによって具体的な流れを決める。しかし実際は、無宗教葬を希望する喪主に何をやりたいのか尋ねても、9 割以上の人が「分かりません、葬儀社にお任せします」と答えるため、葬儀社としては「何もないのをやるのは結構大変」だという。残り 1 割の「本当にちゃんと（無宗教葬を）やろうとする人は、喪主や家族がずっとしゃべっている。故人さまに対する思いや馴れ初めとか。そういう形であれば、

私たちもいいかなと思うんですけど」とF葬儀社は無宗教葬の実態を語る。

> もし何もやることが分からないようであれば、みなさんが、来られた方が安心するのは、どんな宗教であっても、どんな宗派であっても、お寺さんが来るのはやっぱり安心するよと。お葬式だけでも、お寺さんに来ていただいたらどうですかとお話をして。ほとんど（そのように）変わります。（2021年4月27日、F葬儀社への聞き取り）

F葬儀社でも、コンテンツ不在の無宗教葬選択者に対して僧侶の介在を提案している。その根拠として会葬者の安心感に言及している。

ここまで、僧侶の介在しない葬儀の実態を確認することで僧侶の役割を捉え返す糸口を探ってきた。葬儀社は僧侶を、葬儀という場の形を整える存在として、また葬儀に意味を付与する存在として捉えていることが明らかになった。次節では、僧侶による実践に着目して僧侶の役割を記述する。

3-3　法話――僧侶による語り

本節では、僧侶による葬儀実践、なかでも法活に焦点をあてることで、僧侶の役割を明らかにする。法話とは、僧侶によって行われる説法であり、「一般の人々に向かって仏教の立場から語り、法を説く」実践である［石川ほか編 1990：5-6］。

3-3-1　葬儀社の視点からみた法話

まずは葬儀社視点で法話の実態を確認する。F葬儀社は、遺族が葬儀全体の良し悪しを判断する観点として、葬儀前後の僧侶とのコミュニケーションのほかに、法話に言及している。

利用者さんが望んでおられるのは、お経の質ではなくて、そのあとの（僧侶との）お話であるとか、もしくは始まる前にお話しをされる方…も多いんです。（遺族は）お寺さんの優しさであったり、法話のありがたみを感じ取ることによって、いいお通夜だったな、いいお葬式だったなと感じられることが多いのかなと思う。（2021 年 4 月 27 日、F 葬儀社への聞き取り）

上記の発言において法話は、遺族にとって僧侶の人柄を判断したり、葬儀全体の印象を左右するものとして捉えられている。

またＧ葬儀社でも、法話が僧侶による重要な葬儀実践として言及され、それは葬儀社には代替できないものであることが示された。

考え方とか教えとか、（故人の死は）どう受け止められるのかという方向性は、お経ではほぼ伝えられないと思うので。…言葉の影響力がお坊さんにはある。同じタイミングで葬儀屋が出てきて、この人の死によって……と言ったとて、葬儀屋が何を言っているんだとなる。でも、同じことをお坊さんが言うと、ほーなるほどとなる。何を言うかよりも誰が言うかってやつで。そういう存在感や影響力が今もまだあるので。……（それが）袈裟を着て、前に立つということの意味。（2021 年 5 月 4 日、G 葬儀社への聞き取り）

この発言には、注目すべき指摘が２点ある。第１に、読経と法話の性質の違いである。現代日本においてお経の意味を理解できるのは、知識人や普段から仏教に関心を寄せている人に限られる。他方で法話は、平易な言葉が用いられることが多いため、仏教に精通していない人の理解を促す手立てとなりうる。また、読経は経典通りに予め決まった言葉を唱えること

が重要であるためにアレンジを加えることはできないが、法話は語り手である僧侶の裁量によって、ある程度自由に言葉を紡ぐことができる。

第2に、僧侶と葬儀社に期待される役割がそれぞれ異なることである。葬儀を滞りなく進行したり、遺族の意向に沿った形で葬儀をコーディネートしていく役割は、葬儀社が担っている。一方で、「考え方とか教えとか、(故人の死は) どう受け止められるのか」に関して言葉を尽くしていく役割は、現状、僧侶に期待されていると考えられる。[16]

しかし近年、法話を行う僧侶が減少傾向にあるという。その理由の一端は僧侶側の問題であり、F葬儀社曰く、「苦手みたい、お話することが。ひどい方だと、お葬式に来られて挨拶をされない方もいる。……それに利用者さんが激怒されて、お葬式までのお付き合いで終わってしまうところも何件かあった」という (2021年4月27日、F葬儀社への聞き取り)。一方、葬儀社側の事情もある。G葬儀社は、法話を「嫌がる葬儀社もある。(葬儀の) 時間が長くなるから。帰る時間が遅くなるから。……葬儀社自身が (法話を) 自ら消していっているというのもあるかもしれない」と語る (2021年5月4日、G葬儀社への聞き取り)。

3-3-2　僧侶の視点からみた法話

次に、僧侶の視点からみた法話の実態を確認する。5名の僧侶による法話は、実施時間、場面、内容に注目すると、表3のように整理できる。

表3　法話の実施状況

	場面	時間(分)	内容	
A寺住職	中陰	—	③	住職と故人との思い出
B寺住職	通夜※	一言	①	葬儀の意味
	繰り上げ初七日	15	②③	法名の意味、住職と故人との思い出
	中陰	—	①③	お内仏のお給仕、故人の思い出、故人のゆくえ
C寺住職	繰上げ初七日	10〜15	②③	法名をつけた理由、故人の思い出、故人の生前の言葉
D寺住職	通夜	—	①	葬儀の意味
	繰上げ初七日	—	①③	葬儀の意味、故人の人柄
E寺住職	通夜※	2〜5	①	人の死や葬儀の意味
	繰上げ初七日	15	①②③	白骨の御文に関する話、法名の意味、故人の思い出

【凡例】①葬儀・仏事の意味　②法名の意味　③故人に関すること

※法話に準ずるものが実施される。

法話の実施時間は、通夜や繰上げ初七日などの儀式中に行う場合、短いもので２～５分、長くても 15 分程度であった。通夜や繰上げ初七日では、会葬者の心情や会館利用の時間制限を考慮すると、15 分以内がひとつの目安となっていた。一方、中陰での法話は、実施時間を制限する要因が少ないため、遺族の様子をうかがいながら自由に調整できることが分かった。

法話を行う場面は、３つにパターン化できる。第１に、通夜と繰り上げ初七日後の２度にわたり法話（法話に準ずるものを含む）を行うパターンであり、B、D、E 寺住職がこれを実践する。E 寺住職は、通夜では名古屋別院のリーフレット[17]を読み上げるにとどめ、繰り上げ初七日では 15 分程度の法話を実施している。第２に繰り上げ初七日で行うパターンであり、C 寺住職がこれを行っている。C 寺住職がこのタイミングで法話を行う理由は、会葬者らがこれで帰れるという安心感を抱いており、場の空気が落ち着いているからである。第３のパターンは、通夜や葬式では法話は行わずに中陰[18]で行うことで、A 寺住職がこのスタイルをとっている。A 寺住職は、通夜や葬式で遺族らは「泣いていれば良い」とし、死別直後に遺族に頭ごなしに仏法や宗祖親鸞の教えを押しつけるのは良くないと考えている。さらに、死別直後にはかける言葉が見つからないという。

法話の内容は、住職らの話を整理すると３つ（①葬儀・仏事の意味、②法名の意味、③故人に関すること）に大別できる。①葬儀・仏事の意味を法話で語っているのは、B、D、E 寺住職である。②法名の意味には、B、C[19]、E 寺住職が言及している。③故人に関することとは、具体的に故人の人柄や故人との思い出、遺族の知らない故人の一面を指し、B、C、D 寺住職が法話のなかで語ることがある。ただし、住職が生前の故人の生き様を知っていたり、故人に関して遺族に尋ねられる場合にのみ言及される。B 寺住職は、法話のなかで故人の人柄を語ることで、その法話を聞いた遺族が故人を思い出すきっかけになればと考えている。一方、A 寺住職は

故人に関する内容について、喪家が周囲に知られたくない事柄である可能性もあるので、法話のなかで言及する際には非常に神経を使う必要があるとする。

3-4　住職らの葬儀観――宗教儀礼と僧侶

本節では、住職への聞き取りをもとに、各住職が葬儀の意味をいかに捉え、葬儀における自らの役割をどのように認識しているのかを確認する。

3-4-1　葬儀を営む意味

ここでは、葬儀を営む意味を尋ねる質問への直接の回答と、住職の語りの節々に表れた表現を拾っていくことで、各住職の葬儀観を順に整理し、最後にキーワードとなるものを示す。

A 寺住職は、葬儀を通して味わう「愛別離苦（あいべつりく）」、深い苦しみと悲しみこそが、仏や仏法に出遇（であ）う[20]最大のチャンスになるとする。葬儀から中陰にかけて、亡き人の声を聞く耳を持つ人となり、「自らの命をかけてまでも、この私を仏さまに導いてくださる案内役を買って出てくださった方として」亡き人と出遇い直すことが大切であるとする。さらに、葬儀ではなく法事のことになるが、法事は一同が集うことで親戚のつながりを確認するほか、法事の後に行われるお斎（とき）（会食）は親戚間のみならず住職と次世代（喪主など）との関係性を構築する場であったという[21]（2021 年 3 月 16 日、A 寺住職への聞き取り）。

B 寺住職は、葬儀はこれまで仏縁のなかった人や縁遠かった人と関係性をスタートする場であると表現する。遺族や故人と親しかった人には、枕経や通夜の際に、「故人さまのことを一人一人思い出していただいて、何を残してもらったのかということを考える時間に二日間はして下さい」と伝えているという。また、自分の葬儀で息子たちに迷惑をかけたくないと

相談を持ちかけてくる高齢の門徒に対しては、自身が喪主を務めた先代の葬儀の経験から、「苦労した葬式の方が息子さん達のためになる」と答えているとし、「当時はすごくしんどいなと思ったが。……これだけの方にお別れしていただける方だったんだなというのも分かる」と述べる（2021年4月5日、B寺住職への聞き取り）。

C寺住職は、「宗教的要求の出発点みたいなきっかけになる場所が葬儀」であると語る。我々は何に向かって手を合わせているのかなど、その意味を受け止めていく教育の場であるとする。葬儀はいのち[22]や亡くなった人の死を考えたり、亡き人との出遇い直しや家族のつながりなどいのちに触れていくものであると述べる（2021年4月8日、C寺住職への聞き取り）。

D寺住職は、真宗大谷派存明寺住職の酒井義一氏による指摘[23]を引用して、葬儀の願いは「お別れはお別れなんだけれど、死は他人事でないとか、亡くなった人とちゃんと出遇い直す」ことにあるとする。また、「お釈迦様から仏法を聞いたように、亡くなった方から大事なことを聞かせてもらいたい…気づかせてもらいたいという願いがお葬式にはある」と門徒に説明しているという（2021年4月9日、D寺住職への聞き取り）。

E寺住職は、真宗大谷派宗憲第2条[24]に触れ、「葬儀を営む意味は、浄土へ還る人間（マ）い（マ）のちの尊厳を学ぶための儀式の執行」にあるとする。E寺住職は、今日の寺院を取り巻く状況への危機感[25]から先進的な取り組みをしているが、その根底には「お寺がなくなったら教えを伝える（こと）自体もできなくな」るという思いがあり、「布教と儀式を執行するという2点に関しては間違いない」とする（2021年4月12日、E寺住職への聞き取り）。

住職らの語りを表4のように整理すると、葬儀を営む意味は4つに分類できる。すなわち、①仏・仏法に出遇う縁を結ぶこと、②亡き人と出遇い直すこと、③いのちや死を学ぶこと、④家族のつながりを確認したり、生者間の関係性を構築したりすることの4つである。

表４　各住職の葬儀観

	葬儀を営む意味	
A寺住職	①	死別による苦しみや悲しみは、仏や仏法に出遇うための最大のチャンス。
	②	亡き人の声を聞く耳を持つ人となり、もう一度亡き人と出遇い直すことが大切。
	①④	多くの人が亡き人を偲びながら仏法に出遇うご縁を結ぶご法事の場、 親戚一同が繋がりを確認するご法事の場、酒を酌み交わしながら いろんなお話しをして関係性を構築するお斎の場。
B寺住職	①	それまで仏縁のなかった人、縁遠かった人のスタート。
	②	故人のことを一人一人思い出し、何を残してもらったのかを考える時間。
	②	苦労した葬式の方が遺族のためになる。 これだけの方にお別れしていただける方だったんだなと分かる。
C寺住職	③	葬儀は教育、亡くなった人の死ということを学ぶ場。
	②④	亡き人との出遇い直しや家族のつながりなど、いのちに触れていくもの。
D寺住職	②③	別れではあるが、死は他人事でないことを学んだり、亡き人と出遇い直す。
E寺住職	③	浄土へ還る人間いのちの尊厳を学ぶための儀式の執行。

【凡例】①仏・仏法に出遇う縁を結ぶ　②亡き人と出遇い直す
③いのちや死を学ぶ　④つながりの確認、生者間の関係性構築

3-4-2　葬儀における僧侶の役割

次に、各住職が葬儀における自らの役割をどのように認識しているのかを確認し、キーワードを抽出していく。

A 寺住職は、僧侶の本分について、儀式の執行と教法の宣布にあるとする。門徒は大切な人の葬儀を「一世一代の儀式として執り行うわけですから、僧侶は襟を正して臨み、厳かに、一生懸命にお勤めさせていただかなければならない」という心持ちで臨んでいるという。また、悲しみにくれる門徒に寄り添い続け門徒が自らの心の内を語れるようになるまで待つこと、門徒が重い口を開いてくれるようになった後にはそっと耳を傾け続けることが大切であるとする（2021 年 3 月 16 日、A 寺住職への聞き取り）。

B 寺住職は、葬儀について「今日は故人さまとお別れする日なんだと思ってもらえるようなお勤めをしないといけない」と、他の法要以上に厳粛な雰囲気の儀礼になるように心がけているという。また、僧侶は「仏さんと関係者の間に立っている……パイプ役」であるとする。「それがいらんとなったら、（読経の）テープで、BGM で良いし。……（これが）そうじゃ

ないところでの役割」であると、僧侶の役割の一端を、仏と生者とを仲介する点に見出している（2021 年 4 月 5 日、B 寺住職への聞き取り）。

C 寺住職は、「儀式というものを通して……いのちを考えたり、生きることについて考える場」をつくることが僧侶の役割であると語る。また、この裏返しとして、昨今の僧侶の介在しない葬儀について、「生きとる者の思いを伝えるだけの話であって。……いのちが分からなくなっていく」と述べる（2021 年 4 月 8 日、C 寺住職への聞き取り）。

D 寺住職は、僧侶の役割を「お別れの時のお別れを仏事にする」こととする。ここで言う仏事とは、「儀礼、儀式を通して、その人の死に向き合う、その人に向き合う。その人を通して、自分に向き合う」ことであるとする。また、門徒の抱える死別の悲しみを、親戚や親子とは「違う意味で共有できればなと思います」と語る（2021 年 4 月 9 日、D 寺住職への聞き取り）。

E 寺住職は、僧侶の役割を、「儀式を執行することで、浄土へ還る人間のいのちの尊厳を伝えるとともに、大切な家族友人など有縁の人々に自分のいのちもいつか浄土に還るべきいのちの不可思議さを伝えること」として言及する。しかし最近の葬儀は全体的に、儀式が疎かにされているように思われるという。かつては「猫が死んでも三部経[26]」と言われた土地柄にも関係すると前置きをした上で、E 寺住職は読経の質の低下を指摘する。「上手い下手ではなしに、丁寧に。……懇ろにお勤めさせて頂くということが大事じゃないか」と述べる（2021 年 4 月 12 日、E 寺住職への聞き取り）。

住職らの語りを次ページに示す表 5 のように整理すると、僧侶の役割は 3 つに大別できると考える。すなわち、①儀式を執行すること、②仏法に基づき、いのちや生きることについて伝えること、③門徒に寄り添うこと（傾聴）の 3 つである。

表５　各住職の僧侶の役割観

		葬儀における僧侶の役割
A寺住職	①②	儀式の執行と教法の宣布。
	③	死別悲嘆の門徒に寄り添い続け、門徒自らが口を開くのを待ち、耳を傾ける。
B寺住職	②	故人、生者（遺族、会葬者）、仏のパイプ役。
C寺住職	②	いのち、生きることを考える場をつくる。
D寺住職	①②	儀礼、儀式を通して、その人の死に向き合う、その人に向き合う。
E寺住職	①②	儀式を執行することで、浄土へ還る人間のいのちの尊厳を伝えるとともに、大切な家族友人など有縁の人々に自分のいのちもいつか浄土に還るべきいのちの不可思議さを伝える。

【凡例】①儀式の執行　②いのちや生を伝える　③門徒に寄り添う

4. 葬儀に僧侶が介在する意味

本章では、ここまで示してきたことを整理しながら、昨今の葬儀に僧侶が介在する意味について、３つの観点から考察する。

4-1　葬儀における形式の観点から

葬儀における形式の観点から僧侶が葬儀に介在する意味を検討すると、僧侶は葬儀に一定の形を与える存在として捉えられている。このことはまた、遺族が弔いの実感や情緒的な安心感を得ることにつながると考えられる。

3-2 では、僧侶の介在しない葬儀の実態を検討することで、葬儀における僧侶の役割を捉え返してきた。そこで明らかにされたのは、当初の意向では火葬式（僧侶なし）や無宗教葬を選択していた喪主も、葬儀社の提案によって考えを改めるケースが少なくないことである。また、低価格志向の利用者が多いＦ葬儀社であっても、葬儀に最低限必要な要素として僧侶の介在が念頭に置かれていたことも注目に値する。

上記の文脈で僧侶は、葬儀に形を与える存在として捉えられている。[27] 葬儀に形が与えられること（具体的には、僧侶の介在そのもの、読経、法名

の授与など）は、遺族が故人をきちんと弔ったと実感したり（「最低限のことだけはやってあげられた」）、情緒的な安心感を得ること（「お経をあげていただくと安心する」）につながる。また、遺族が弔いの責務を一定程度果たしたことを、会葬者に向けて対外的に示すことにもなる。

3-4-2 でも確認したように、G 葬儀社は「言葉の影響力がお坊さんにはある。……何を言うかではなく誰が言うか」と語る（2021 年 5 月 4 日、G 葬儀社への聞き取り）。本稿の冒頭で触れたように、今日の葬儀において僧侶と葬儀社は、各々の役割に関するすみ分けの曖昧さが問題視されることもあるが、上記の発言は、相互の役割にある程度の線引きした上での表現と受け取れる。僧侶は、故人の死に際しての受け止め方について語ることを許され、遺族や会葬者に聞く耳も持ってもらいうる立ち位置にあると言えよう。そしてこれを実際に語る機会のひとつが法話である。

4-2　家族葬における法話の役割の観点から

昨今の葬儀において法話は、法を説くのみに留まらず、故人の新たな一面をあらわにする役割も担っていると考えられる。3-1 で確認したように家族葬が広まるなかで、法話の位置づけが変化している可能性を検討する。

E 寺住職は、家族や親戚だけの葬儀で、10 ～ 15 分程度の法話を行っても文句を言われることはないとする一方、義理で参列している会葬者の前で長々と法話をした場合、会葬者にとっては「かなわんというのが現実」であろうと推察している。さらに、「昔は、仏法聴聞（ぶっぽうちょうもん）でお通夜で法話して、みなさんに聞いてもらえたというところがあるけれど」とかつての様子を語った（2021 年 4 月 12 日、E 寺住職への聞き取り）。ここには、3 段階の葬儀変容とそれに伴う法話の位置づけの変化が見て取れる。会葬者に葬儀の意味について共通認識（ここでは、「仏法聴聞」がこれにあたる）があった「共同体の葬儀」においては、仏法を耳にする機会として法話が理解さ

れていた。しかし、多様な葬儀観を有する人々が参列する「義理の葬儀」の時代には、法話は語り手である僧侶が非常に神経を使う場面となった。そして現在は、故人と関係性の近しい人々が集う「親密圏の葬儀」へと移行し、そこにおいて法話は、一定時間であれば時間を割くことを許されるものとして理解されていると言えよう。

さらに、昨今の葬儀においては、法話の積極的な位置づけも見出せる。D寺住職は、昔[28]は葬儀において法話は必要ないと考えていた。その理由は第1に、かつての葬儀には多数の地縁関係者が参列しており、葬儀ごとの会葬者が現在よりも重複していたことから、同じ内容の法話をすることが心苦しかったからである。第2に、喪家は弔問客の対応に追われて多忙であり、落ち着いて法話を聞いていられるような状況にはなかったからである。第3に、大勢の会葬者が故人に関して語っていたので、住職の語りは殊更必要のないように思われたからである。しかし現在、家族葬に代表されるように地縁関係者や義理の参列がなく、血縁関係者が大半を占める葬儀において、D寺住職はかつてよりも法話を行いやすくなったと語る。各葬儀の会葬者が重複することは激減したため、法話の内容が前回と同一でも良いと、法話を行うことへの心理的ハードルが下がったのである。さらに、

> 故人の友達とかね、親戚とか地域の人が来ると、親とか親戚とは違う付き合いだから、違う一面が分かるわけですけど。自分もお寺としての付き合いの中で（故人と）こういうことがありましたと言うと、ああ、そんなことあったんやなと遺族の方は思うことがある。……（故人と）出遇い直すというかね。……（これは）大事なことやなと思うけどね。（2021年4月9日、D寺住職への聞き取り）

知人や親族、地縁関係者などが参列するかつての葬儀では、会葬者の会話を通して故人を偲び、遺族らの知らない故人の一面がしばしばあらわになっていた。故人に関して新たな一面を知るという形で、自ずと故人と出遇い直す機会が用意されていたのである。しかしながら昨今、故人を偲ぶことに一役買っていた地縁関係者が葬儀から姿を消しつつある。このような状況においては、法話に故人の人柄や故人との思い出を盛り込むことで、僧侶がその役割を補完している可能性が示唆されているのである。

4-3　お別れ会と仏事の観点から

最後は、お別れ会と仏事の意味づけ上の差異に注目する。3-4-1 で見たように、D 寺住職は僧侶の役割を、「お別れを仏事にする」こと、自分は「親戚じゃないし親子じゃないし違うんですけど、（その人の死を）違う意味で共有できれば」と語る。では、「違う意味」とはどのような意味だろうか。これは、D 寺住職に法話の心がけを尋ねるなかで聞かれた、「最後は、手を合わせて南無阿弥陀仏というところまでもっていきたい」という表現に示されていると考えられる。本節では、D 寺住職の言う「南無阿弥陀仏というところ」を手がかりに、葬儀に僧侶が介在する意味を検討していく。

C 寺住職は、葬儀仲介業者「お坊さんのいないお葬式」の登場を受けて、その背景には僧侶に対する不信感があり、「お寺さん何やっているのと……否定的な形で問いかけをされている……危機的状況」であると語った。さらに、宗教を伴わない儀礼はどのような意味があるのかとの問題提起がなされた。

> こちらが答えていかなければならないのは、…僧侶の役割と同時に、僧侶がいないとか、儀式執行をしない死とは何かという（こと）。結局お別れ会になってしまって。……生きとる（ママ）者の思いを伝えるだけの

話。……亡くなった人との出遇いとかいのちとかをどう考えていくんだと。……それがないところにいのちが分からなくなっていく。あるいは人間の傲慢さが出てくる。（2021 年 4 月 8 日、C 寺住職への聞き取り）

葬儀が生者の思いを死者に一方的に伝えるお別れ会になってしまい、死者が自らの身をもって生者に教えてくれること（いのちとは何かなど）を見落とすことが懸念されている。C 寺住職の発言は、僧侶を介した葬儀の場が、遺された生者が「死者から発される声[29]」に耳を傾け、いのちについて考える機会になる可能性を示唆していると言えよう。

C 寺住職同様、「死者から発される声」、もっと言えば死者の存在そのものをないがしろにすることに警鐘を鳴らす者もいる。宗教哲学者の佐藤啓介は、「私たちの多くは死者を忘れ去って生者だけでこの世界を生き、この世界を構築することに、ある種のためらいを覚えている・・・。伝統的な宗教は、こうしたためらいをさまざまな概念を用いて説明し」てきたと述べる［佐藤 2017: 3］。この「ためらい」へ応答するものが、D 寺住職のいう「南無阿弥陀仏というところ」であると推察される。

浄土真宗の意味世界において、阿弥陀仏は死者も生者もすべて等しく包摂する存在とされる。浄土真宗の僧侶は、葬儀に介在するなかで阿弥陀仏の存在を強調することによって、生者のみに留まらない意味世界を人々が意識する機会を創出しようと努めていると考えられる。この文脈において死者は、遺された生者に対して、生や死に思いを巡らせる契機を与える存在として位置づけられる。さらに、阿弥陀仏の世界を想定することで、我々の生が個をこえてより大きな流れ（いのち）に接続していると捉えるような視点がもたらされるのである。

5. おわりに

本稿では、住職と葬儀社への聞き取り調査の結果から、岐阜県西濃地域周辺の葬儀の現状を確認し、僧侶が葬儀に介在する意味を３つの観点から考察した。第１に、僧侶は葬儀に一定の形を与え、それは遺族が「故人をきちんと弔った」という安心感を抱くことにつながる。第２に、僧侶はかつて地縁関係者が担っていた役割の一部を補完する。法話で故人の人柄や思い出に言及することは、遺族に故人の新たな一面を示し、遺族が故人と出遇い直す機会を提供する。第３に、僧侶は葬儀を、生者の思いを故人に一方的に伝えるお別れ会ではなく、故人の死を契機にいのちについて考える仏事にする。これら３つの意味は、同一の葬送儀礼において重なり合っており、様々なレベルで人々に受容されているのが実際のところであろう。

今後の課題としては、第１に調査対象寺院、葬儀社の数が限られており、サンプルバイアスの影響を免れないことから、調査方法を工夫し、調査対象者を増やしつつ考察を進めることがある。第２に、葬儀への僧侶介在の意味が、手次寺の僧侶と手次寺以外の僧侶とで異なるのかどうかを検討することがある。本稿では、手次寺の僧侶の役割を中心に記述してきたが、今後は派遣僧侶など手次寺以外の僧侶への役割期待との比較のなかで、両者の共通点と差異を示す。第３に、本稿での結論は特定地域の真宗大谷派寺院による葬儀のあり様から得られた知見であることから、地域性や宗派による違いを考慮に入れ、本事例から得られた知見の普遍性と特殊性について検討していく必要がある。

引用資料

岐阜県環境生活部統計課編 2020a「市町村別人口世帯数・人口動態」『岐阜県人口

動態調査結果（推定人口）（令和２年４月１日現在）』（https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/167395.pdf, 2021.6.24）.
岐阜県環境生活部統計課編 2020b「市郡別、宗派別宗教法人数」『令和元年岐阜県統計書』（https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/204966.pdf, 2021.6.19）.
岐阜県西濃保健所・西濃保健所揖斐センター 2020『西濃地域の公衆衛生 2019』（https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/168061.pdf, 2021.5.25）.
岐阜県社会福祉協議会（https://www.winc.or.jp/shicyoson/, 2021.6.29）.
石川教張・中野東禅・藤井正雄編　1990『現代仏教法話大事典』雄山閣。
お坊さんのいないお葬式（https://sousou-shiki.jp/company/, 2021.6.4）.
大森嗣隆 2020『無宗教なのにどうしてお葬式にお坊さんを呼ぶの』三恵社。
佐藤啓介 2017『死者と苦しみの宗教哲学――宗教哲学の現代的可能性』晃洋書房。
真宗大谷派宗務所企画室編 2014『別冊『真宗』第７回「教勢調査」報告書』真宗大谷派宗務所。
曹洞宗総合研究センター編 2003『葬祭――現代的意義と課題』曹洞宗総合研究センター。
新村出編 2018『広辞苑第７版』岩波書店。
新谷尚紀・関沢まゆみ編 2005『民俗小辞典　死と葬送』吉川弘文館。
玉川貴子 2018『葬祭業界の戦後史』青弓社。
上田万年・岡田正之・飯島忠夫・栄田猛猪・飯田伝一編　1993『新大学典特装版』講談社。
ヤマショウ株式会社（https://eikounoayumi.jp/m/map_illust/chubu/gifu/seino.html, 2021.6.29）.
吉水岳彦 2021「浄土に往き生まれて」『現代と親鸞』44：228-250。

註

⑴　葬祭業界に働く人々の技能振興を目的に導入された厚生労働省認定資格である。この資格制度は、宗教者（僧侶）とは異なる形で、葬祭業者（葬儀社）を権威づける方法だったとされる［玉川 2015：95、97］。

⑵　インターネットを介した葬儀仲介業者の台頭を、葬祭ディレクターの大森嗣隆氏は平成の終わりに起こった葬儀業界のパラダイムシフトと表現する。大手４社（小さなお葬式、よりそうのお葬式、イオンのお葬式、いい葬儀）が現代日本の葬儀数の１割（推定）を獲得している［大森 2020：42］。

⑶　2019 年８月に設立され、株式会社 NINE & PARTNERS が運営する。主な事業内容は、インターネットによる葬儀社や葬儀会館の紹介である。本社は愛知

県名古屋市で、岐阜県西濃地域の僧侶の間でも話題になっていたが、2021 年 5 月 31 日にサービスを終了した［お坊さんのいないお葬式 HP］。

⑷　本稿では葬儀社の視点を、遺族の意向を掬い取る手立てとしても扱う。

⑸　おつとめ（お勤め）とは、お内仏（ないぶつ）（本尊・阿弥陀如来を安置した仏壇）の前で親鸞聖人の「正信偈」や蓮如上人の「御文（おふみ）」を拝読することである。正信偈のおつとめができることは、信心の篤い真宗門徒を象徴する行動様式とみなされている［真宗大谷派宗務所企画室編 2014：122］。

⑹　月参り（お常飯）は、A 寺住職が「お常飯で、月参りで門徒さんとの関係は構築していくもんなんだろうなという気がしてならない」と指摘するように、門徒との良好な関係性が築く重要な機会であると捉えられている。

⑺　ラポールとは、聞き取り調査などの質問調査を円滑に行う上で重視される、調査者と調査対象者との間の深い信頼関係のことを指す。

⑻　オトリコシとは、各家庭のお内仏（仏壇）での報恩講を指し、その語源は本山の報恩講を取り越し（時期を早め）て勤めることにあるとされる。

⑼　寺院の土地（田）での小作（門徒）による稲作のため、少数の門徒で寺院が成りたっていた。しかし戦後の農地解放によって、寺院所有の田は失われた。

⑽　一軒の家として男寺･女寺が決まっており、葬儀に際しては性によって決まっている寺に導師を依頼する習俗を指す［新谷・関沢編 2005：114］。

⑾　G 葬儀社の調査対象者は大谷派資格を有する。このことは、調査協力に対する好意的な姿勢につながったと考えられる。ただし結果の分析においては、僧侶の視点を併せ持つ語りであることに留意する必要がある。

⑿　鳴物（なりもの）である鏧（きん）を打ち、勤行を進めていく役割を担当する僧侶。

⒀　火葬場から還ってきたお骨を迎える際に行われる儀礼。

⒁　一般葬、家族葬、一日葬、火葬式の割合は、F、G 葬儀社の回答通りに記載している。他方で無宗教葬の割合は、F、G 葬儀社への聞き取りをもとに筆者が算出している。それらを合算してグラフ化したため、円グラフの合計は 100％を超えることになった。

⒂　G 葬儀社はインターネットを活用した葬儀仲介業者と提携している。

⒃　ただし同時に、「葬儀の価値をお寺さんが伝えられないのであれば、我々（葬儀社）が伝えないといけない。昔はお寺さんがやってくれていたけれど、今はやってくれない」と、僧侶が葬儀の意味を伝えることに消極的な場合があるとの声も聞かれた（2021 年 5 月 4 日、G 葬儀社への聞き取り）。

⒄　これには人の死や葬儀の意味が簡潔に説明されている。

⒅　A 寺の中陰は、門徒の希望により夜に勤められることが多い。昼に行うよりも多くの者（兄弟や息子夫婦、孫、嫁いだ嫁とその子など）が集う。

⑲　ただしC寺住職は、法話を行うよりも前のタイミング、具体的には枕経を終えて通夜を行うよりも前に門徒宅を訪ね、法名の意味を伝えているほか、遺族に故人の思い出などを尋ねることもある。

⑳　「遇(あ)う」という表記には「たまさか」の意があり［上田ほか 1993：2315］、「思いがけないさま」や「まれであること」を示す［新村編 2018：1828］。三帰依文(さんきえもん)には「無常甚深微妙(じんじんみみょう)の法は……遭遇(あいあ)うこと難(かた)し」とあるが、仏法や師、仲間などとの出あいは偶然であるとともに、あうべくしてあったという必然のニュアンスを含むものとして理解できる。

㉑　現在は新型コロナウイルスの影響で、多くの法事は少人数の参列、お斎なしの形態をとる。この傾向をA寺住職は「寂しいかぎり」とし、「なにか大事なことが無くなってしまったという感が否めません」と述べる。

㉒　仏教では「肉体的な生命(いのち)は各生ごとに死しても、なお宗教的な寿命(いのち)は生き続けていくこと」が説かれるが［吉水 2021：229］、ここでの「いのち」も個別の生を越えたより大きな流れを想定したものとして捉えられる。

㉓　真宗大谷派存明寺住職の酒井義一氏によれば、葬儀の願いは、「しっかりお別れする」、「亡き人と出遇い直す」、「死を他人事にしない」の3点にあるという。

㉔　真宗大谷派宗憲第2条には、「本派は、宗祖親鸞聖人の立教開宗の精神に則り、教法を宣布し、儀式を執行し、その他教化に必要な事業を行い、もって同朋社会を実現することを目的とする」ことが記されている。

㉕　E寺住職は、「今、黙っていても（人々の方から寺院に）来てもらえるような時代じゃない」と述べ、寺院が座して待つのではなく、寺院側からの働きかけが必要であると語る（2021年4月12日、E寺住職への聞き取り）。

㉖　この地域では丁寧な儀礼を重んじてきたことを指し示す比喩表現。

㉗　この文脈において僧侶は、葬儀を葬儀たらしめる「型」のひとつとして捉えられる。

㉘　ここでいう昔とは、自宅で葬儀を行っていた時期という意味合いと、大勢の地縁関係者が葬儀に参列していた当時という意味合いとを併せ持つものとして理解できる。

㉙　「死者から発される声」という表現は、A寺住職への聞き取りを参考にしている。A寺住職は遺された生者が、「葬儀から中陰をとおして、亡き人の声を聞く耳を持つ人となり、もう一度亡き人と出遇い直すこと」が重要であると語る（2021年3月16日、A寺住職への聞き取り）。

謝辞

本稿の執筆にあたり、西濃地域周辺の各寺院のご住職さま、葬儀社さまをはじめ多くの方々からご協力を頂きました。ご住職さま、葬儀社さまそれぞれの模索のあり様など、本稿には記載することのできなかった部分も含め、多くの知識や示唆を頂戴しました。ここに深く御礼を申し上げます。

（磯部（いそべ）　美紀（みき）　大谷大学大学院文学研究科博士後期課程第三学年　社会学専攻）